

昭和  
二十四年  
四月十五日

七月二十三日

第三種郵便物認可  
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第二五三号)

# 慈光

第二十三卷

第六号

## 次

仏陀を近きに求めよ……………近角常観……………(1)

法華経余話(その一)……………福島政雄……………(4)

一道会の記(四)……………榊原徳草……………(10)

## 目

歎異抄愚考……………杉藤美代子……………(15)

聖人の常の仰せ……………花田正夫……………(18)

# 仏陀を近きに求めよ

近 角 常 観

宗教は何よりも高尚なるものなることは、誰も承知していることなるが、唯高尚であるというのみを思つて、全く吾人の思想の達せぬもののように思う弊がある。これは大なる誤解である。固より宗教は、人間以上の境界を説けども、その人間以上の境界が、吾人人生と連絡がなければ宗教とは言われぬ。固より絶対の境界は、吾人人間の思想を超越したものであるが、その絶対が絶対として存在して、吾人人生との間に渡るべからざる海灣が横たわつておつては、決して宗教とは言われぬ。そもそも宗教は絶対それ自身を名付けたものではない。その絶対世界と人間界との間に架せられたる「橋梁」である。故に、宗教の一端はたしかに絶対無限の彼岸に続くものなれど、他の一端は明らかに相對人生の世界に、吾人の手に達しておらねばならぬ。宗教としては、むしろ吾人の手に触れるところが嬉しいのである。しかるに世人は、宗教は高尚であるという一方面のみを眺めて、その高尚なるものが卑しき人間界に

適切に受け取れる点をかえりみるものはすくない。それ故とかく宗教のことと云えば世外のことのように思う人が多い。  
世人が仏陀といへば、多少の信念を有するものなれば、これを崇めることは知りて、崇高なものであると思つているのはよいが、これを遠きに置いて眺めておつて、これを近くに求めることを知らぬ。その仏陀の手が我々の手に達していることを知らぬ者が多い。  
全体、仏陀の手が我々の手に達しておらねば、とても我々が融合することは出来ぬ。絶対が絶対として控えていては、とても我々相對のものが如何に悶えても、手は達せぬのである。しかるに、仏陀はその絶対が先方より我々に向つて引接せんと企てたる「御手」である。故に我々はこれにすがればよいのである。

仏陀はもとより絶対の境界なれど、その絶対が一面は相對の形をとつて相對の世界にのぞみ給うのである。我々は

日夜あさましい日暮しをしておれば、そのあさましき者に對して、慈悲の手が触れるのである。愚昧なる心を起しておれば、その心中に智慧の光明がさしこむのである。飛びつくばかりに仏の手に達してみれば、いかにも、何時始めともなき絶対の世界につりこまれるのである。仏は仏の世界より我々を召喚し給うのである。我々はその呼び声が聞えてみれば、その世界へ生れるのである。

さて生れてみれば、「無生の世界」に融合さるるのである。たとえて言へば、我々が眠つてるとき、他のさめた人が手を以て揺り起し、声をもつて呼び起してくれるときこれを夢の中に感じている。即ち夢の中の現象にまじつてゐることがある。時としては夢の中にありながら、我は夢みてゐるのじゃ、と思つてゐる時さえある。されどその思つてゐることまでが夢である。さていよいよ醒めてみれば本来醒めたる世界に出て来たのである。されど、醒めた人があつて、眠つてゐる我々を揺り起し、呼び起し給わずば長夜の夢の醒めるべきはずがない。故に醒めた人を醒めた人として、高きに置いて眺めても何の益もない。救ひのこの手が嬉しいのである。この助けの声があるがたいのである。仏陀を近きに求めよ、とはこの味である。

かく云へば、その仏陀なるものは全体理想ではないか、畢竟（ひっきょう）内心の投影であつて、客観化したもの

ではないか、と疑う人があるかも知れぬ。されど、私の揮む仏は決して理想ではない、客観的の實在である。夢の中に声を聞いておつても、聞こえた声はたしかに醒めてゐる實在の聲に違ひない。その實在の聲が夢に入ってくるのがあるがたい。されどその聲は實在に違ひなければ、夢の世界より眺めてみれば、五官の經驗を越えてゐる。五官の經驗を越えておればとて決してこれを理想とは云われぬ。その實在の仏陀とは、即ち因果酬報（いんがしゅうほう）の果体である。我々を助けんとし、我々を救わんとして、その慈悲の塊が即ち仏となられたのである。

全体、仏陀も始めは我々如き人間である。人のためにするといふ慈善心が源となり、因果律によつて知らず識らず仏陀になつたのである。故に、仏陀にはたしかに始めがあるのである。されど仏陀の位置に達した以上は、時間的にその生命は無限である、空間的にその光明は無限である。故に、全体この如き仏陀の歴史が、人間が絶対に達し得べき証明である。

しかし私はこの仏陀の足跡を追うて同一の軌道を反覆しようとは試みぬ。只仏陀の實在を信ずれば、直ちに仏陀に接することが出来る。その實在を信ずることの出来るのははじめ我々が感じ得べき人間の姿をもつて、我々を助けんといふ大願を起し、その結果、遂に仏陀になられたからで

ある。故に、この大願が我々人間の耳に達し得べき召喚の聲である。

私はかく、實在の仏陀の導きによって絶対の境に導かれている。されど理想の仏陀を拜む人を否定はせぬ。しかし理想なるものは、手の達せぬものである。若し手の達するものならば、理想ではない。故に理想を追うて我が足が一步進むときは、理想もまた一步先方へすすむ。かくて無限に理想を追うて進む有様が、即ち理想の仏陀が絶対に導く有様である。この時は、これに達せんと欲して追うて往くのが愉快なのである。故に理想の仏陀は、むしろ手のとどこかぬところが絶対に導く所以である。即ちこれが自力の修行である。

これに反して、實在の仏陀は手のとどこところが絶対に導く所以（ゆえん）である。されど實在の仏陀を拜む人といえども、決して理想の仏陀を否定すべきはなく、理想の仏陀を拜む人といえども實在の仏陀を否定すべき訳はない。理想を主張したるプラトーンが、靈魂不滅論に死後の世界を實在的に記載しているのはすこぶる面白い。

（信仰の余瀝、十四章より）

### ○ 惠空師語録

しばしば忘るとも信心なき身と思うべからず  
たとえば人の家に行くに、その主人他出して人なしといえども、家主なしと云うべからずと、竜樹の論に云うがごとし。たとししばしば忘るとも、信心なき身と云うべからず。

○ ならぬ心をうちすて、ただ仏願をたのめよ。

内外相応の身となれかしと、こぬ人を待つようにかまえ居たりとても、成り得る期もあらず。またなり得ても、善き自力にてこそあらめ、報土の往生はこれ必ず不可なり。成るや、ならざるやの我心をうちすて、撰取衆生の仏願をたのむべきなり。

○ 深心と云うも機の上の浅深の深にあらず。祖師は諸機の浅心に対するが故にと云えり。辰宿大なれども月に及ばず恒河深しと云えども海に比せず。諸機の中の定心等、深けれども、何ぞ深広無涯底の仏智に比せんや。

横川の法語に「信心浅けれども本願深きが故に、たのめば必ず往生す」と云えり、これは深は仏に約す。機の意業を論ぜざるなり。吉水の聖人は「義なきを義とし、よなきをよとす、浅きは深きなり」と云えり。同じ意なり。

## 法華経余話（その一）

法華経を読んでいますと、法華経を受持し誦誦し解説せよ云々ということが繰返し迷べられてあります。お経の全体がこのことで終始しているように感ぜられます。これは元來釈尊の御説法が同じことを繰返して懇切にお説きになったその形式が伝えられているのだらうと思われるのであります。

併しその間に色々の廣大無辺ともいうような説話が出ていますのであります。その事は此のお経の最後に至るまで続いていきます。

常不軽菩薩品に現れている常不軽菩薩の過去についても広大な因縁が述べられており、菩薩は此の因縁を背景として出現されるのであります。そして傲慢な出家の修行者に対して、「自分は深く汝等を救う、決して軽んぜない、汝等は将来必ず仏になることが出来るのだから」と申されま

### 福 島 政 雄

のがあつて悪口を言い罵詈（ばり）して、「此の無智な奴は何処から来て我々が仏になるなどと証明するのか」と言い、「こんな奴から仏になるといふ証明などして貰わなくともいい」とのしりますけれど、菩薩は決して怒らず、杖で打たれても、石を投げつけられても、それを避けて遠方から相変らず「汝等は皆まさに仏となるであらう」と高声となえます。それで常不軽菩薩といわれるのであります。

此の常不軽の行を実行して居られた人を私は親しく知っています。それは白杵祖山先生と申して、私が二十年ばかり仏教の信仰上のお育てを受けた方でありました。白杵先生は私などに対してもお逢い下さる時には必ず合掌せられましたので、私はいつも勿体なくて困っていたのであります。此の白杵先生について「荷車の歌」という小説に次のようなことが出て居ります。

「荷車の歌」の女主人公はおセきさんと言う人でありま

す。此のセキさんが七十六才になるまでの一生は実に何とも言えない苦惱の引続きでありまして、おしまいには夫の茂市が老年になって妾を連れ込んでセキさんと一緒に生活させるようになって、セキさんの苦惱は絶頂に達し、泣いても泣いても誰も慰めてくれる者もないから、セキさんは夕飯もたべずに夜半まで泣きました。とうとう涙の根が枯れたのか、泣く自分がおかしくなっていて、あたりを見まわしました。その時ちらりと目にとまったのは、仏壇の小引出しと棧の間のすき間に見える、何かわからない白いものでした。引出しをあけてみると色紙でした。

南無帰命常不軽天上人間唯一人

と書いてありました。これはセキさんが仏教婦人会の世話をしていた頃、その家を講話の場所にした時に説教にいられた臼杵和尚という人が書いて下さったのだと思います。此の和尚は寺も持たず、妻も持たず、法隆寺で十三年間、そば粉をたべて勉強したという人でした。セキさんが御座の宿をした翌朝、お膳を持ってこの部屋へはいって来たなら、自分の硯を出して墨をすっておられて、今日の記念にこれなりと取ってくれと、この字を書かれたのでした。

セキさんがこの言葉のわけをお尋ねすると臼杵和尚は次のように言われました。

子供の時には鼻汁を垂れていたなどとさえ言っていて、その人を含めて落そうとするような劣等な根性を持っています。若し他人が害を加えようとしてもしましたならば、怒りの心を発してその人をたたきつぶそうとします。常不軽の行と蕘するというのは私どもの根性でありまして、自分ばかり善い者であるかのように思いあがっています。それで常不軽菩薩の行というものはなかなか私どもに出来ない、むしろ仏様が常不軽の行をもって私どもを呼びさまして下さると感じます。常不軽菩薩の行は仏様が私共に対せられる慈悲の心の現れであります。

如来の神力を述べられるところは、夢幻の世界に導かれるような感じでありますが、一切の世界が釈尊と多宝如来とを中心とする無限の美しさにかがやくという感じであります。

次に釈尊は無量の菩薩の頭をなでて、如来は大慈悲があって、やぶさかなことがなく、衆生に仏の智慧、如来の智慧、自然の智慧を与えるところに仏凡融合ぶつぼんというような感じを受けます。そして菩薩達の歡喜するところ私どもの歡喜もあります。私どもも釈尊の御手をもって

常不軽菩薩という菩薩様は、おしゃか様の前生で、人を見ると誰でも、お前は仏になれるぞと説かれた方じゃ、菩薩がそう言われると、人々は水をはねかけたり、石を投げたり、いたずらばかりした。それでも菩薩は人をみると、お前は仏になれるぞというて説かれた。私が大変尊敬する良寛和尚さんは、この常不軽菩薩を非常にしたわれていた。そこでこの御文を書かれたものと思われる。この御文は良寛和尚の御文じゃ。私も仏の道を知らん間は常不軽菩薩に石を投げたり、水をかけたりした連中とおなじことをしたのであると思うて、この御文がなつかしい。

此の臼杵和尚というのが私の親しくしていたいた臼杵祖山先生であります。先生は実に常不軽菩薩その人をおぼせるような方でありました。

此の常不軽菩薩は釈尊の前生であると述べられています。そして法華經を受持し説誦し、他人のために説かれた為に無上の悟りを得られたのであります。そして菩薩をそしり石を投げたりした者も後に菩薩の教化を受けて無上の悟りを得るようになるのであります。

常不軽の行というのはなかなかむづかしいことであります。私どもは自分の傲慢の心ゆえに他人にけちをつけることが多いのであります。他人が立派になっておれば、嫉妬の心が湧いて、あの人は今では立派になっているけれども

頭をなでられていることを感じます。私共も釈尊の仰せられることを遵法して行きたいと思うのであります。

それから薬王菩薩本品の中について感じますことを述べようと思います。薬王菩薩の前生は一切衆生善見菩薩と云って、日月淨明德如来という仏様について法華經を聞き苦行もして精進しましたが、併し眞の精進は身を献ぐることであると感じ、自分で自分の身を燃して、その光明があまねく八十億恒河沙の世界を照すと云われてありますから、焼身供養の功德は非常なものと考えられるのであります。

この焼身供養ということが問題であります。我が国平安末期の頃でありましょうか、法華の持経者が焼身供養を行なったということが伝えられています。それは墮落して行く社会に一大覺醒を促すために行なったのであるとも言われています。また燃臂(ねんび)供養ということも実行せられ、これも世の中を覺醒するためであったと言われています。

併しこれについて私は考えますのであります。これは燃える火の中に飛び込んで焼け死んで見せたり、臂をもやして見せたりすることではないと思えます。そんなことをして見せても墮落した世間が心の眼をさまして立派になる

ものではありません。法華經の講義などを読んで見ましても燃臂供養や焼足供養の意味の説明は無いようでありますが、焼身供養というのは全身燃ゆるような熱誠を献げて正しいまことの道を説くことではありませんでしょうか。たとえ日蓮上人のような人が焼身供養をした人ではありませんまいか。また燃臂供養というのは偉大な心のはたらきを腕にあらわして、その腕が熱するほどに道を説くことではないでしょうか。其の身の火が燃ゆること千二百歳というのは後世への感化というのであろうと思います。薬王菩薩は此のような意味でその前生に身をまことの道に献げて燃し尽したということでありましょう。これが私どもに対しての大切な教訓となります。

我が身の過去前生に全身をまことの道に献けたという生命の背景が、この世に生れてもそのまことの道を求めて精進する力を与えるのであります。我が身は久遠の過去を持ち、久遠の生命力が私どもを動かしているのであります。

日月淨明德仏の舍利を供養するために、一切衆生喜見菩薩が、八万四千の塔の前におたて百福莊嚴の臂をもやすこと七万二千歳とありますが、これは久遠のまことのいのちが十方世界に光明となつてかがやくことではありますまいか。それは十方世界に及ぼされるまことの力であります。

ります。然るに女人は変じて男子とならなければ成仏出来ないということ、經の根本精神にもとること、反することではないでしょうか。或は仏教の上では小乗の心持ではないでしょうか。大乘精神の極意を明かにする法華經としては、矛盾のことではないでしょうか。併しこれは法華經に限らず、大無量壽經の四十八願の中の第三十五の願にも此の事が述べられてあります。女人救済の願でありまして女人が阿弥陀仏の御名を聞いて歡喜信樂して菩提心を發し女の身をきらうならば、此の世のいのち終つてもはや女の姿とならないようにしてやるという願であります。これはどんなことになるでございましょうか。

一体仏典の中には女人を悪く言つてある言葉が色々あります。五障三従の女人という言葉を始めとして、外面は菩薩の如く、内心は夜叉の如しとか、女人は地獄の使であるとか、女人は大魔王となることも出来ないが、仏になることも出来ないとか、たとい大蛇を見るときも女人を見るべからずとか、又は地獄の刀葉林では女は男を永遠にだまして迷わせる者であるということが述べられてあります。世界の文献で女をこれほど悪く云つてある類例はあまりないと思われるのであります。

併し仏教の女性観はこれだけのことではないのであります。女を悪く言つてあるのは女人救済のためであると思わ

次に女人についてまた特別のことが説かれてあります。

若し如来の滅後、後の五百歳の中に女人があつて、此の法華經を聞いて、説のとおり修行したならば、此の娑婆のいのちが終つてから、安樂世界の阿弥陀仏の大菩薩衆がとりまいてるところに往つて、蓮華の宝座の上に生れるであろう。また食欲に悩まされず、瞋恚や愚癡に悩まされないのである。また憍慢や嫉妬やその他の心の汚れに悩まされないであろう。菩薩の神通力と悟りを得るのである。この悟りを得て眼が清らかになり、清らかな眼をもつて、七百万二千億那由他恒河沙なごうがしやというような涙山の仏を見たてまつるだらうと述べてあります。なお女人がこの薬王品を聞いて能く受持する者は、此の女身を終つて後にまた女身を受けないだらうということも最初に述べられています。

この阿弥陀仏の淨土に生れるということは殊に注目すべきことであると思われませんが、再び女身を受けずということとは變成男子ということであろうと思われまゝです。變成男子という言葉は提婆品に出ている言葉でありまして、女身を転じて變じて男子となるということで、提婆品では八才の童女が目の前で變じて男子となつたと述べられています。

これは問題であります。法華經の大精神は方便品に明かにせられておりに、一切の人々がそれぞれに自分の個性を發揮してしかも互に和らいで行くということであ

れます。仏教の女訓で最も懇切であると思われるのは玉耶經であります。これは給孤獨長者の息子のお嫁さんである玉耶が、心がけの悪い仕方のない女性であつたのが釈尊の御説法によつて心を改め全く別人のような立派な心がけの妻となるということを述べられてあるお経であります。この中で釈尊は玉耶に向つて、女は三障十惡の者であるといふような極端なことを仰せられて玉耶の反省を促されています。それで仏教において女を徹底的に悪く言つてあるのは、女性の根本的反省を促すためであるといふことになつてきます。ドイツのショーペンハウエルや、オットー・ワインゲルのように女に対してただ極端に毒づくのとはその精神が全くちがうのであります。

大乘仏教の經典には女性を非常に高く見あげてあるものが色々あります。太子様が推古天皇の御前で講釈なされたといふ勝鬘經の中心人物である勝鬘夫人は、男子も及ばぬ勝れた女性であります。十大受、三大願などの精神は男子もなか／＼及ばぬ精神であります。また華嚴經の善財童子の求道物語の中に現れて来る五十三の善知識の中には女性が幾人もあるのであります。その中で婆須密多女はすみつたというのは大変な淫女のように見えて、実は立派な善知識であります。嬰夷女えいゐは、結婚にあつて夫となるべき増上功德主太子をまことの道に導く女性であります。摩耶夫人は一切の

大菩薩の母と仰がれています。

もっとも勝れた女性を勝れた人として述べるということだけでは仏教の精神が徹底したとは言えません。それで変成男子というだけで、どんな女性でも変じて男子となつて成仏するのでしょうか、女性が女性として救済せられねば仏教の精神であるとは言われません。そこで観無量壽経と涅槃経とに現れて来る韋提希夫人が重要であるということとなります。観経の最初に現れている韋提希は全く愚痴の女性であります。それが釈尊のおかげで信心徹底するのであります。涅槃経においては全く立派な母性を發揮するのであります。変成男子ではなく、女性そのまま徹底してあります。ここに仏教の眞精神が徹底していると思われれます。殊に母性として徹底するところ、ここに大切な意味があります。

それならば変成男子ということは結局どうなるのでしょうか。それは仏教の精神では結局女人も男子と変らないということ、女性が変じて男性になるということではなく、女性は女性のままで男性にかわらぬ人間としての資格を持ち、信仰の上でも徹底するにいうことを、此のような風に言いあらわしたものであらうと思われるのであります。眞実精神の問題になれば女と男にちがうことはないということであり、それを目に見える形で示そうということので変

## 一道会の記(四)

ここで一応休憩することにしました。

その間に私は、来月から、ここ浄住寺で第二日曜日午後一時から「静坐と仏教講話会」を『一つの会』主催で、今後毎月開催することを御披露しました。

休憩後、西元先生からも、私が勤務先をこのたび退職して、この毎月の会を創めることになったので、参会されたいと、重ねて呼びかけて下さいました。

次に、カナダの留学生の生田さんから

「西元先生と上田義文先生のお導きによって、今日この一道会に参加させて頂いたことを本当に嬉しく思います。諸先生方とお会い出来たこと、又先生方のお話と、おいでになるお姿を拝見させて頂いて、何かこの部屋が、光輝々という語がありますが、輝いている感じがいたしますのであります。

そしてその中に坐らされていることを思うと本当に自分は幸せ者であると、そう今日は感じさせられました。留学

成男子という特別の言葉を用い、提婆品ではそれを目の前で見せるということになつていたのであります。

此の世に男子として生れるのも、女人として生れるのも遠い昔からの約束事であり、久遠の過去からの因縁の事であるというのが仏教の考でありますから、男子と生れても女子と生れてもそれをどう変更することも出来ないということが厳然たる事実であります。そこに仏のお慈悲が徹するところに男子としても女人としても落着くことが出来るということが法華経の本當の精神であると思われるのであります。

(昭和三十九年十一月四日稿)



## 榊原徳草

生の諸君に代つて、嬉しかったこの会に出られたことを心から御礼申し上げます」

とお礼の挨拶がありました。

次いで、四国の葛西まさあさんから

「二十年前に、榊原先生にお会仏のお話を伺いまして、その後はお手紙の上でお伺いしていましたが、去年の一道会に初めて参会させて頂いて、皆様立派な方ばかりで、何かつらい気持ちでいました。

その夜は泊めて頂いて、翌朝、先生と奥さんと、何とゆうことなしにお話をしていました。その時に二河白道のお話が出てきて、聞かせて頂いていました。私はそれまで、二河の水と火の河も念仏しておれば足を取られずすむ、足を洗われる程度で、その中に落ちこむことはないと思つていました。ところが、『水火の二河に墮することをおそれれ』というのは、墮ちる私だからおちていいんだ、

ということだと教えられ、「では落ちてもいいのですか」と申しますと、奥さんが「そうですよ、私もおちてもいいんですよ」と云われました。「私もそうでした」とも仰言いました。

その時、本当に私は嬉しかったんです。これまではお話を聞きながら、こんなことでは、とぼっかりで聴いていました。その時「こんな私だから」と知らされました。帰る途々、あゝそうであったのかどくりかえしうなずきました。それで何か落着いたようでありました。

昨年は、そんなことで、それで今年もお参りさせて頂くことになりました、有難うございます」

葛西さんは二十年間、赤チャンを抱いて暗い顔をして、塩ノ江の宿舎のお座敷に、講話後の座談会に出していた、私がお会った最初の顔が今でも浮ぶ。御主人に亡くなられて幼児を抱いて淋しい暗い姿がいつでも思い浮かんでくるのであった。

その後一二回位の四国の御縁であったが、その外は、長い手紙の往復で、お念仏の法信が交わされ二十年が経ったのであった。抱かれていた赤チャンは立派なお娘さんになっていられる。その娘さんから、或時は不明の電話がかゝる方々がよくこんで居られる、それを見るにつけて私も真実の信仰が欲しいと思うようになりました。

私は業が深い奴で、当時京都に下宿していたが、行く先々の家で夫婦喧嘩が絶えない。そこで自分の家庭生活はもっとまじな、好い日暮しを持ちたいと色々考えましたがよい智慧も出ません。それで愛の神様のキリスト教に入ったから家庭もうまく行くだろうと思って、そちらに入りましたそれは親鸞会に遭う三四年前のことです。

さてキリスト教に入ってみると私の前に非常に困難な問題が沢山あることが判ってきました。すべての者を愛せよ、生物は殺すな、酒も煙草もいかん、あらゆる悪を自分でおさえていく、そんな点があります。それは結構なことでは喜んでやっていたがだん／＼行き詰ってくる。私の知らぬうちに沢山の生物を踏みつぶしている、私に他の生命を殺してよい権利はない。それをつき進めると、自分が死ぬか他を殺すか、どうにもならないことになった。

そんな時、私の前の飲み友達が、石田君この頃頬がこけているな、どうしたんだときくもので、実はこうなんだと云うと、お前は阿呆だな、それだけキリスト教に真剣になるなら、君の家に代々伝っている宗教の本当の話を聞いてみたらか。

私はここで、あゝあやまったなと思った。それでも少し

ったこともあり、あとで聞いて知ったこともあった。またここへ内密で来られたこともあったそうである。それから母娘共々慈光にひかれて、昨年から参会して下さるようになった。

お娘さんは、その後お友達と二人で泊りがけに来られたこともあったが、これもお母さんのお手だて誘引であるところがありがたく思う。いつかきつとお娘さんも念仏せられると信じている。今年、葛西さんの晴々した顔を見ると、かつてのお姿が二重写しになって、如来善巧の跡を私に示現して下さるのである。切々寄り添うてやまない不可思議の理性とか論理、感情をはるかに超えた、横超の如来の本願力が、例えば、水河の流れる如くにひしひしと迫り押しして徐々（じょじょ）にはあるが、決して後退することなく私共の業に即して、抱き包み、撰取不捨と念仏に遭わせて下さる姿がありがたく尊く、合掌せしめられる。

次いで、古い昔の同信会時代からの法友、石田十九三君のお話を伺った。大要は次のようであった。

私はこういう有難い会合で話すなどの資格は無い者であります、二十七歳の頃、京都学生親鸞会の御縁を得まして、府下の横田先生や、池山先生の御講話を聴聞しまして、本当のお信心が欲しいと思えました。集っていられずつでも善いことが出来ることを喜んでいましたか、身体は弱ってくるし、頬はこける眼は血走ってくるでどうにもならなくなつた。

そこで私の家の宗教である東本願寺の総会所へ行きました。すると布教使の方の言うのに、

「君はキリスト教をやっている、一生懸命やればその方でも救われるだろう。しかし友達言葉で驚いたというが私も同感だ。君がキリスト教を続けてやれないと行き詰つたら来なさい」

と。それからまだ一年位続けましたが、始めの間はキリスト教の綺麗な所ばかりをみていたが、続けていく間に、同じ人間であるから悪口も云い、色々の事が耳に入ってきた。これだったら始めの私の目的が達せられないと思つたので、もう一度本願寺の総会所へ行つたのです。

その時、実は私はキリスト教をやめる時の罰が恐ろしかったので、それについて布教使の方にお尋ねすると、そんなことはない、救うという神が罰を与えることはない、だから君がキリスト教に進めない理由を、天の神様にお詫びしなさい、そうして気持が落着いたら又ここへ来なさい、という答でした。

私も疲労困憊（こんぱい）している時でもあり、丁度五月頃でしたが、京大農学部グラウンドの真中に坐りこんで

お詫びしました。神様に、私のような力のない者はどうしても教の通り実行出来ませんからやめさせて頂きます。これからは私の家に伝っている真宗の教を聴かせて貰います。が、どうかお許し下さい、と真剣にお詫びしました。

するとすっかり気分が楽になったのですが、その時すぐ真宗の教を聞けばよかったですけれど、何分にも疲労していたので、暫く求道の気持が止ってしまいました。

そうして居ると今度は善い事が一つも出来んのが気にかゝるようになりました。そこで、自分でも、苦しくても前の方がよかったなという気持が芽ざしてきた時分に、丁度学生親鸞会の人々の渦に引き入れられたのです。

そのうちに姉がにわかに死ぬ、私も人間の寿命の予測できない哀れさを深く感じるようになり、早く安心立命せねばいかんと思ひ、榊原先生その他の諸先生方にお話を聴かして貰いに通ったものです。

そのうちに姉がにわかに死ぬ、私も人間の寿命の予測できない哀れさを深く感じるようになり、早く安心立命せねばいかんと思ひ、榊原先生その他の諸先生方にお話を聴かして貰いに通ったものです。

そのうち家内を貰い家庭生活に入ったので、家内にもお念仏をすすめました。その頃、私は御法話がわかりだしたところで、あれもありがたい、これもありがたいというこ

私は先生に、先生の著書「絶対他力と体験」を読んでも判りませんと申し上げました。先生は「ただ念仏ですよ」とおっしゃる。それで、その後は、仕事をしていてもただ念仏していました。

先生はその時「歎異抄を読みなさい」と云われた。私はよく歩きながらも本を読みました。その頃、私は一日に一遍は歎異抄を読もうと決心していました。ことに第二章の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の子細なきなり」と、これは何遍も読みかえしたところでありますからスラ／＼と読めそうなものですが、あるとき、その「ただ」を読みかけたとき、アーンというような、内から突きあげる叫びと、外からの慈悲とで私はもう、念仏がせきを切って出て参りまして、アーン嬉しい、あゝそうだったんか。分解して云えばただという言葉は幾通りにも使えるが、今のこのただという言葉は、お慈悲のかたまりである。お慈悲のかたまりを頂いたときに、念仏が出ずにおられん状態になったんだと私はあとから思っております。その後は、お念仏のいわれとか、そんなむつかしいことは聞く必要がなくなり、ただお念仏さして貰うて暮しておりますので、皆様にお話するような持合せがありません。

先生方のおすゝめで、こんな話をしました。何かにつけ

とでした。

或る日、家内が、ある先生の所へ行って帰るなりに、あゝありがたいと云って、お仏壇にお参りして、正信偈の途中でもう感極って、続けられなくなつて了いました。どうしたわけか、ときくと、あなた理屈を言うていては駄目ですよ、その理屈言う身体全部を救うて貰ねば、何も彼もお念仏一つです、理屈ではありません……こう言つて私に説教するようになったものだから、私はそれまで先生方のお育てで少しは仏法が解り出してきたと思つていたのですが、妻のことがあつてから、何もかも一遍に分らんようになって了つた。真暗な谷底へ突き落されたような気持になつた。

はじめには家内にも仏法を喜んで貰いたいという気持があつたのに、その家内が喜ぶようになると、私はねたましい心になつた。このねたましいような心が、私の本性であつたと気づいて、私もそれから一生懸命にお念仏のお話を聴いて歩きましたこれは仏様が私を求めていられたのであります。

そうこうしているうちに、今迄の悩みが念仏と共に解決したのです。それは池山先生のお宅へ伺つてお話をうかがつた時、――それは何年になるか、それから二三年たつてからだつた。

お念仏は、私の知らないバックボーン、一つすじの通つたものが、私に与えられていることを、しみじみありがたく感じております。今日はありがとうございました。

石田君は毎年一道会に来られる。只今は求道の歷程をこゝろに精しく伺うことが出来てありがたい。もう四十年も前、下鴨に同信会が出来、念仏の灯火がともつた。その頃の如来より賜つた法友とありがたく思つている。年月の過ぎ去ることに關係なく、万里一条の鉄というか、今日お互いに白髪を頂く齡になつても、この「ただ」で開華した念仏の一道は、日々に新であつて、すこしもその香薫、その光沢は変らない、お浄土の岸まで吾等の上に内に外にこの蓮華は咲き続けるのである。南無阿弥陀仏。

こうして一道会は終つたが、あと精進料理で夕食となり食後はなごやかに法味を交わしました。その夜は、松本先生、三河の山本さん、長崎の松本さん、それに香川の葛西さん、その二十年來の法友の神奈川の森田さんなどが宿泊下さつて、阿弥陀湯にひたりづめであつた。

翌朝名残りを惜みながらお別れした。来年もこのように一人も欠けないで一道会が開けますようにと、私の心中に喜びと愁しさが交々ゆきかうのであつた。



# 歎異抄愚考(四)

杉藤 美代子

## 第二条 解答の続き

この第二条は、東国において親鸞聖人の御子善鸞が、念仏よりほかに父上から授かった教義があるかのように吹聴したということ、かつて聖人と御縁のあった人々の間に動搖があったということですから、そういうことから聖人が力をこめて念仏の一事をさとされるその意図があったものと思われまゝ。

歎異抄は十八条まであり結文がついています。十条で一応終った形で別序というのがありあらためて第十一条から書かれています。近角先生は、十一条以下はそれぞれ一条から八条までの解説文であると、見ぬかれた方です。そのお説に従い、この第二条のあと、その解説として第十二条をつづけて読解してみます。こういう形で書いた註釈書は見当りませんが、ともかく近角説は卓見と言ひべきで、第二条の解説はそのまま第十二条が受けまゝから、第十二条以下はなるべく原文に忠実に読解して見ます。なお、歎異

学問しても、このすぐれた仏教の真実の主意を理解出来ないということ、もっとも気の毒な困ったこと、でありまゝ。一文不通、即ち学問のことは一向に何もわからず、経文の、解釈の、そんなことがらのすじみちも全く知らないような人が、称え易いようにと与えられた「なむあみたぶつ」の名号でありますから、この他力本願を易行、即ちやさしい行といたす。学問を主体とするのは聖道門といわれまゝ。これは難行とよびまゝ。まちがって学問などをして、名譽心や、自己の利欲の思いにばかり終始している人こそは、次の往生はどうであらうかということを書かれた証文もあるくらいであります。

このごろ、念仏修行をする人と、聖道門の自力仏教を修行する人とが、仏法の議論をして「自分の宗派こそすぐれている、ひとの宗派は劣っている」と言うが、それだから法の敵も出てくるし、法をそしめるということも起ります。このことは、しかし、自分で、自分の信ずる法をそしめるということになるのでないでしょうか。たとい、他の宗派の人が、みんな「念仏によつて救済されるなんていう考え方は、いくじのない人間のためだ」とか「念仏宗なんか全く浅く、程度の低いものだ」と批判しても、一向に争うことなく、「わたくしのような、仏道を修行する力の弱い煩惱にみちた者、学問のない者が、信すれば助かるということ

抄は真宗の僧侶の虎の巻でありましたから長い間門外不出他見あるべからずとされていきました。

## 第十二条

「お経文やその解釈を読み学ばない人々は、救済されるかどうかわからない」という人があると聞くが、このことは誠に訳のわからぬむちゃくちゃだと言ふ外ありません。

一体、他力の真実の教義を明らかにしているさまさまのお経文は「この仏陀の教え、弥陀の本願を信じ奉れば仏になる」というのであって、そのことを信ずる以外に、一体何の学問をしたら、救済されると言うのでありましようかそこで真実のこの道理、即ち「弥陀の一切衆生を救済せざるばやまじ」といふ本願を、信じて念仏すれば救済される」ということは、一体ほんとうだろうか、心迷うような人があればその人は、なるほど本人の思う如く学問して、弥陀の本願の主旨、その実態は、理論はと、せいぜい学問して本願の主旨を知るべきです。然し、経文やその解釈を読み

を、うかがつて、信じて居りますので、仏道を修行する力の強いお方のためには、低いと思われましようとも、わたくしどものためには、これ以上の法はないと思われまゝ。

たとい他の教えがすぐれて居りましても、自分のためにはとてもそれで助けていたただけの才能がございませんから、努力することも出来ません。私もひとさまも、この人生のはかなさつらさに思いなやむこの苦しきから救われることこそ、諸仏の本當のみ心でいらっしやるのだから、どうか、わたくしこの思いを邪魔なさらすに於いてくださ

い」といって、憎めない態度でいたならば、一体どこのだれが、それに対して攻撃しかけてくるであらうか。  
なおまた、議論し争うところには種々の煩惱がおこるものだ。(即ち論争の対象とする議論からはなれた相手への憎しみとか、うぬぼれとか、冷たい独善の心とか、後味のわるさ、それからくる恨み等々)

「智者遠離すべし」即ち物事によく通じた人(経文を信心の形でなく博学の形で受取っていることで高慢心を起している人の意か)から遠ざかるべきであるということを書いた証文さもあるくらいです。(だから議論し相手をうち負かすということを主眼にとつた場合、信仰ということから離れた知識学問の世界になっていくので、自らのほからいを捨て弥陀の本願にたより奉るといふ線て謙虚な信仰心

を失なわないようにしなければならぬものです。

故親鸞聖人は、次のようなことを仰せられました。

「この法を信ずる人々もあり、そして人々もあるであらう」と、釈尊が、前からお説きになっていらしたことから「わたくしは、もう全くお信じ申しあげる、又他の人はこれを悪口云う、それで仏説はまことであったというところがわかる」（とこういうことになりました）ですから（それにつけても）救済はます／＼定まったものと、お思いなさるべきであります。万一悪口言うそういう人がなかった場合には「一体どういうわけで信ずる人はあるけれど、悪口言う人がないのだろうか」とふしぎに思われるでありましょう。但し、こう言うからといって、必ず人に悪口言われるであらう、というわけではない。（そのわけは）仏さまが、信、謗（そしり）ともにあるであらうということを示して、後世の人が、そうした立場に立った時に疑念をおこさせまいと思われて、前もって説いておかれたそのことを私が、言うわけなんです。（だから、人にそしられることが起っても疑念を持つことはない、又それは当然おこるべきことであつたと考へるべきだし、さりとしてそしられないからおかしいと考へる必要もないわけです）」

と、こう親鸞聖人はお説きになったのです。今の世の仏法者の多くは人にそしられ、ば、何とか学問して博学をもつて人々のそしりの口を封じ、論議問答を目的としようと

## 聖人の常の仰せ

先日、本居宜長の学問する心得を聞いて、非常に心うたれた。その中に「誰しもむつかしいことを聞きたがるが、それより前によくわかつていると思つてゐる事の中に、実際は本当にはわかつていない事が多い。まずこの解つてゐる、心得ていると思つてゐることを何度も聞きただして、その間違いを改めるのが大事である」ということであつた、

蓮如上人の御一代聞書に

「仏法に厭足（えんそく）なければ、法の不思議を聞くといえり。前住（蓮如）上人仰せられ候。たとえは世上にわが好きこのむことをば、知りても／＼なおよく知りたく思うに、人に問い幾度も数奇（すき、風流の道を好むこと）たることをば聞きても／＼よく聞きたく思う。仏法のことはいくたび聞きても厭（あ）かぬことなり。知りても／＼存じたき事なり。法義をば幾度も／＼人に問いきわめ申すべきことなる由、仰せられ候」

こう力んでいらつしゃる（というわけでありましょうか）

（仏法を学ぶということは、ひとに勝つのが目的ではなくて）学べば、ます／＼仏さまの本当のお心を知り、人すべてを救わんと悲願（われかれの知識をこえた大変な慈悲の願）のいかに広く大きいものであるか、その主旨を理解するものでなくてはなりません、そして「私のようなやしい身で仏の救済を仰ぐことができるでしょうか」などと、不安に思うような人にも「仏の本願というものは、人間の考へる善悪とか、きれいとかけがれとか、そういう考へ方を超越したもつと高いもので、あなたのような疑いはいらぬのですよと、こう説き聞かせなされたならばこそ「学者のかい」があるというものでありましょう。それをたまたま何の邪心もなく、弥陀の本願によるお呼びかけ（すべてのものをそのまま救おうとの）に依じて、その仰せを信じて念仏する人に対して「学問をしてこそ救済されるのだ」などと、とんでもないことを言つておどかしなされる、それこそ、法の魔障（仏道をさまたげる悪魔のじやま）であり、仏のうらむべき敵です。そういう人は、自身自身、他力の信心に欠けてゐるばかりでなく、自分のあやまちで他を迷わそうとしてゐるわけでありませう。つゝしんでおそれなさい、亡き師、親鸞聖人の御心にそむくことを。又それとともに、そうした人の行ないが、弥陀の本願とは全く異なるものであることを、あわれに思わねばなりません。

## 花田正夫

とあり、さらに

「ひとつことを聞きて、いつも珍（めず）らしく、はじめたるように、信の上にはあるべきなり。ただ珍らしきことを聞きたく思うなり。ひとつことを幾度聴聞申すとも、珍らしくはじめたるようにあるべきなり」ともある。

こうしたおしえによつて、まづ最初に気づかされることは、私自身が、知識の上で理解して素通りをしてゐることの多い点である。善悪の因果の道理もそうである、生あるものは死ぬということもそうである、頭では充分知つてゐるが、情意のうえ、身体でわかつてゐない。悪いことをしていても悪い結果はうけたくないし、生ある限り死はあるけれど、その死を何処までもこぼみ統けて、勝手に死なぬものときめてゐる。そういう身勝手な、曲つた心で何を聞いても、何を読んでも、唯上（うわ）つ面（つら）を軽く風がなでる程度に終るだけである。こうした時、教と人と

がとろけ合った人格にあり、その実語を聞かされると、自分には本当のことはすこしも解っていないことも自然に知れはじめて慚愧させられる。

次に気づくことは「ほんものには飽きがこない」ということである。偽せものは、書画にしても、一寸目にはよくても、長く見ているとやがて飽きがくる、底が見えてくるものだ。書画の鑑定を能くする人が、真偽がわからぬ時は毎日床に掛けて見ていると自然にわかると云っている。美術の上でもそうであるが、沢山出版される書物にしても、一時流行してすぐまた消えて行くものが多い、何百年何千年と続いて人々の心を新しく打つ書物は人類の宝である。まして仏の真実心がことばとなり文字となった金言、実語というものは、汲めどもつきぬ味わいがあり、ダイヤの玉が見る人の方向によって無数の光彩を放つように、常に新鮮ないのちにふれる。蓮如上人に育てられた赤尾の道宗が「ただひとつおことばをいつも聴聞申すがはじめたるように有難き」と、さすがに深くそこを味っている。

さらに、絶対なるもの、真実なるものに触れるとき、これまでわかった、もう十分であるというものではなく、何時も、知れはじめてこれからだ／＼と感じる。福島先生が、「永遠の黎明(れいめい)」と仰言ったのは実に名言である。たとえば親のまことにしても、その膝下にいる時より

度風食時になったので女中さんが食事を作ってすゝめると翁は、うまい／＼と喜ばれた。そこへ従道さんが帰って、同様に食事をすると、塩味のなのお汁だったので、きびしく女中を叱った。その時、翁がたしなめて「主人の留守中に大切な客を迎えたと思って、一生懸命に苦心して作ってくれた心が嬉しいではないか。とかく緊張しすぎると物忘れし易い、そうまで気をつかってくれたのだ。そうした人の心がわからずには国事は論ぜられぬ」と言われた

仏伝によると、長者が仏陀を供養するのを真似て、舎衛城主、波斯匿王が積尊をお迎えして供養の品々をととのえさせた。然し自身にまだ崇仏の心なかった時で、忘れて当日他出していた。積尊はこのことを知られると、供養をおうけにならなかつた。かくて物とか形式よりもこころを大切にせられる仏陀に出会い王の心もやがて開け、後に篤信の王となった。

高野の学僧、明遍僧都は、法然上人の選撰本願念仏集を讀み、仏陀の八万四千の教の中、念仏一つを勧めることは偏執(へんしゅう)であると批判の筆を進めていた或夜の夢に、沢山の乞食の病人にお粥を与えている聖僧を見て、その尊さに、誰ぞと傍人に聞くと、法然上人とのこと、驚いて夢からさめ、法然上人の勧められる専修念仏は、重病人にあたえるお粥の念仏であったのかと、その支意に気づ

も遠く郷里を離れ、また生前より死後に、更に親の年を越える時と、段々親の本当の姿、その深く広い心が明らかに知らされるものでこれで親はわかったなどと云えない。まして久遠の慈父母にまします釈迦弥陀二尊の甚深無涯底のみこころは、何時も知れはじめ、ききかじりと申す外はない。

本居大人や蓮如上人の読み方、学び方は、こうした大切なことを掲げて、単に知的満足に終ったり、底のない仏法に底をいれてわれ心得顔の慢心におちないようにとの御親切なお言葉である。私自身にこの誠めは大切な警告、身の鏡と仰いでいる。さて、

「聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり云々」

何人もよく知る聖人の常持語であるが、ここで聖人が、五劫思惟の願をよくよく案ずれば、とあることに気づかされる。私共は、人様から物品を頂く時に、そのものよしあし、大小に目をつけて、下さる人の心を見おとし勝ちである。このことについて、中学生だった頃に聞き覚えた西郷南州翁の逸話を思い合せる。翁が弟の従道さんを突然訪ねられたが、外出中で、女中が一人留守居をしていた。丁

き、やがて自分も亦重病人であったと念仏の人となられたのである。

近角先生は、母堂から送りとどけられた手織りの着物をはじめは軽くものだけを受取っていられたが、やがて自身が汗かきの乱暴者だから、市販の着物はすぐ駄目になることを気にかけて、わざ／＼糸をくり、手織りして下さったのだと気づかれたことを、終生くりかえし／＼述懐されながら、本願の念仏を勧められた。

親鸞聖人が教行信証の信巻に

「衆生、仏願の生起本末(しようきほんまつ)をきいて疑心あることなし、これを聞という」

と、仏の本願のよっておこるもとをいたたくばかりであると教えられ、その常の御自身の仰せに「五劫思惟の願をよく／＼案ずれば……」と述べられたのである。

「……ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」

「親鸞一人がため」とある。十方の衆生を救い遂げずばやましと誓われた本願を、どうして一人がためと仰言ったかと私共も不審に思った。しかし、親が子に向う時、その一

人／＼がかけがえのないもの、一人／＼に全分の心を注ぐと聞く。まして弥陀仏は、一切衆生を平等にみそなわれ一人／＼を二子の如く憐愍して下さると、仏自ら告げられている。ところが、相對差別の心しか持たぬ私共は、そうした平等心、大慈悲心を知る由も、知る力もないが、仏はかねてそれを知りし召して、そうした者が可哀想とうまづ、たゆまず、大悲をそゝいで下さる。その不思議な本願を知り得なくても、その繰りかえされる働きは現に身に蒙っている。恰も、太陽の全体は知り得ないが、その光りは現に身にうけてに等しいように。

その働きを「さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と、数限りのない一々の業報の上に入り満ちて下さる大悲として聖人は仰がれている。頼山陽を大喝して改心せしめた大徳、易行院いぎんいん法海師の讃仏歌に

明らけき ひかりを 四方のかぎりにて

月のうちなる 武蔵野の原

武蔵野のチリチリ草の露だにも

身を細めてぞ 月は入りぬる

とあり、西行法師は無辺の願力を

人も見ぬよしなき山の末だにも

澄むらん月の影をこそおもえ

とぐることを極めてありがたき」身に「ただ念仏申すのみぞ未通りたる大慈悲心にて候」の浄土の慈悲は、私の父が臨末の枕頭にあつて知らされはじめ、その後も限りある身の親切や同情の色あせる経験にあうごとに身にしみて感じ、念仏に帰らされている。

第五章の「親鸞父母孝養（きょうよう）のためにとて一遍にても念仏申したることいまだ候わず」の一句は、私自身が父母をはじめ一切の有縁の人々に対し火鉢あつかいしか出来ぬ、飽くなき利己の一念以外にない身に、聖人の仰せが涙をもつてつたわつてくる。

第六章の「親鸞弟子一人もたす候。……つくべき縁あればともない、離るべき縁あれば離るる……」の仰せは、我執、我慢にしばられて、離合因縁の道理も見えず、われこそはと先達めいた心の動くところに強くひびいてきて、その心をくだいて下さる。

第七章の「無碍の一道」は、罪惡と業報に八方塞がりの故に、それにあきたまわぬ無碍の光明を蒙って、障りがあるまんなきさがさわわりでなく転じひらいて下さる。このたのもしさあつてはじめて身にもつ業を受けて、そこを越えさせて下さるのである。

第八章は、聞法し、念仏申す身に育てられると、すぐわれこそはの慢心をおこし、仏法をすぐ鉄鉋にして自害害彼

と、何人もみてくれぬ身によるこそと仰いでいる。

池山先生が「宇治は昔からほととぎすを聞く名所と聞くが、歎異抄の山は如来の声を聞く名所である」といわれ、また「耳を立つればなつかしや、あなたこなたの木がくれに鳴く音をもらすほととぎす、と古歌にある、歎異抄の山に入つて耳をたてると、あなたこなたに如来の音が聞こえる」とも語られた。私自身、歎異抄の随所にそのことを段々味わして貰っているものを具体的にあげて見よう、それは私の「そくばくの業」の上に知らされたものである。

第一章の「老少善惡の人をえらばれず、……惡をもおそれなし、本願をさまたぐるほどの惡なきが故に」の一句は私自身相對差別の心しかなく、是非善惡の綱にしばられてわれとわが力で如何ともすることの出来ぬ身におへだてない大慈悲心のよるべをいただいている。

第二章の「親鸞におきては、ただ念仏して……地獄は一定すみかぞし」の御告白は、どんなにしてみても真実の世界に微塵も近づく力のない身に、聖人が同座して下さつて、救いの綱を与えて下さる。

第三章の惡人成仏の思召しは、われよしと振舞いながらいつも崩れて惡に負けてしまい、相手の出方ですぐ傷つく粗雑なガラス玉同様の身に注がれる慈心である。

第四章の「今生いかにかいとおしふびんと思つともたすけ

する私に、仏法げの微塵もない身と照らし出して下さり、「ひとえに他力にして自力をはなれた」弥陀仏の一人ばたらきのすくいよと導いて下さる。

第九章は「よろこぶころもなく」、「またいそぎ浄土へまいるたきころなき」私に同座して下さつて「仏かねてしろしめし」、「ことにあわれんで下さる」大悲大願、攝取不捨のお誓いのたのもしさを、「かくのこときのわれらがためなりけり」と知らされる。

以上、心にうかぶまゝを歎異抄の中からひろいあげて、私の一々の業報とはなれたまわぬ本願の大悲を讃仰したが、まだ気づき得ぬ業報のすみずみまでも満ちて下さる大悲はこゝろも言葉も及びもつかぬ御恩である。そしてその一つ一つの上に「私一人のため」の願心を頂いて居る。

次に唯田大徳は、この聖人の仰せと共に、

「いままた案ずるに、善導の自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常にしずみつねに流転して出離の縁あることなき身としれ、という金言にすこしもたがわせおわしませず」

と、善導大師の金言を思いあわせていて、こゝに聖人の

仰せには「去・来・現仏、仏々相念」の趣きがあることに  
おどろいている。現在の仏は過去、未来の諸仏を念じ、ま  
た過去や未来の諸仏は現在の仏を念じられている、それは  
自然の感応道交（かんのうどうこう）であるが、聖人の心  
と善導大師の心が一味にとけていて、そのまんまが、釈  
迦、弥陀二尊の思召しにかなうという、不滅のまことにふ  
れる。

大無量寿経のはじめに、仏々相念の釈尊の威容に阿難尊  
者がおどろいたと同じ驚きをもって、「今また案ずるに」  
と大徳は聖人のこの尊容常の仰せを仰いだことであろう。

「さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、われら  
が身の罪悪の深きほどをもしらず、如来の御恩の高きこと  
をも知らずしてまよえるをおもいしらせんがためにてそら  
らいけり」

これは、常の仰せへの大徳自身の領解である。私自身は  
こゝに「わが御身にひきかけて」の一句に心うたれる。所  
謂、世間の指導者、知識人という人達は、自分自身のこと  
は言わずに、人のことばかり、あゝしろ、こうしろ、と説  
く。だから聞く人々には、声は大きいが豆鉄鉦同様に身に  
とどかぬ。

と、その妙用を讃歎せられた。

さて、私は「わが御身にひきかけて」の御導きを以上の  
ようによるこばさして貰つて貰つて、最近フト気づいたこ  
とは、私自身の悪業を、わが身にひきかけて導いて貰える  
のは、世間では親をのけて外にないという当然すぎる事実  
である。父は私の欠点を知って「わしもそのことで悩んで  
いるが、お前もまた」と悲しんでくれた。親以外はわが身  
にひきかけてくれる者はない。それなのに、全く奇なるか  
な、稀なるかな、聖人ばかりが「われらが身の罪の深きほ  
どをわが御身にひきかけて」導いて下さるとは。  
憶うに聖人御自身が、

○大慈救世聖徳皇 父のごとくおわします

大悲救世観世音 母のごとくおわします

○救世観音大菩薩 聖徳皇と示現して

多々（父をいう）のごとくすてずして

阿摩（母をいう）のごとくにそいたまう

○無始よりこのかたこの世まで

聖徳皇のあわれみに

多々のごとくにそいたまひ

阿摩のごとくにおわします

と、聖徳太子を久遠の父、久遠の母としてお慕いになつ

ところが聖人は、まずわが身の上に、愚禿とも、地獄一  
定とも、罪悪深重、煩惱熾盛とも仰言る。これをお聞きす  
る私共にしてみれば、反撥することが出来ないばかりか、  
やがて、聖人の仰言る通り私もそうです、と聖人の心にひ  
きつけられ、おさめとられる。そこに「小慈小悲もなき身  
にて有情利益はおもうまじ」とも「親鸞弟子一人ももた  
ず」と仰言る聖人の上に、私共は、三界の大導師の徳光を  
不思議にも仰がずにはいられない。恰も皎々と輝やく月光  
が大陽の光の照り返しであるように、聖人を縁として、  
弥陀諸仏のひかりにふれる。述懐和讃に

無慚無愧のこの身に、まことのこゝろはなけれども  
弥陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまう

この聖人に導かれて、われらが身の罪悪の深きほども照  
し出される。元来、慢心のかたまり、我執をいのちとする  
身に、自身の罪悪など知れようはずがない、何時までも我  
よし、彼あしに終始している。ただ頂いた「智慧の念仏」  
の働きによってそれが知れはじめるとは実にありがたい  
ことである。池山先生はそれを「念仏の洗悟作用」と云わ  
れた。洗悟とは「どうだね、おまえの本来の姿がわかるか  
ねとさ」とすという意味である」と説明せられ、

われならぬ きよらのわれの われにありて

穢悪のわれを われにしらしむ

ていられるが、幼くして父母に別れたもうた聖人がそこに  
久遠の父母を見出して慶喜讃仰されている。さて私共は聖  
人のみこゝろに、私共の久遠の親を見出し謝すべき言葉も  
ない次第である。

終りに「われらが身の罪悪の深きほど」とは「仏かねて  
しろしめす」如く「煩惱具足の凡夫」であり、その故に  
「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死（の苦海）  
をはなれることあるべからざる」身、言葉をかえて云えば  
「罪悪深重、煩惱熾盛の衆生」とて、おのが罪業の重さに  
沈みきって浮ぶ瀬の絶えてない身のことである。

次に「如来の御恩の高きこと」とは、昔から朽木は彫る  
べかざるといわれるように、煩惱のかたまりで、手のつけ  
ようもない、してみようのない身をたすけとけて人格の無  
上の完成、仏のさとりに入らしめようと、わが御身のいの  
ちをかけてのお誓いをおこされ、やがて点滴が岩をもうが  
つように、長時不断の火と燃える、如来真実の大悲、その  
不可思議の善業である。古語に「谷の深きは、山の高きな  
り」と云われる。我身の罪悪の深さは、如来の御恩を仰ぐ  
唯一のめやすである。「さればそくばくの業を持ちける  
身」こそ「たすけんとおぼしめし立ちける本願のかたじけ  
なさ」を仰ぐ唯一の場である。四五・五・十九日稿了。

あ

と

が

き



に九十年の生涯を傾注せられたことは、真偽の見分けのつかない我々には、誠にありがたいことで、尊い導きを頂いていることよとあらたに感佩させられた。

○ 近角先生の御原稿は、信仰余瀝の中から頂きました。仏御在世の時、イダイ夫人が王舎城の悲劇の渦中に沈んで苦惱した時「阿弥陀仏、是処を去ること遠からず」との至尊の導きを蒙ったことも思い合せます。

幼児の導き方について、先日某氏が「幼い者は是非善悪をおしえ込もうとしている親があるが、無理な話である。白紙のような心を持つのであるから、善悪を問わず、親が毎日行っていることが子の心にそのまま刻みこまれて、やがてその通りにやるようになる。だから善悪も分らぬ幼児を導くには、幼い者は何もわからぬと盲あつかいしないで、親が立派なことを毎日やるという一事が大御である」と語っていた。

それについて思ひ浮ぶのは、両替屋に弟子入りすると、まず純金の貨幣ばかりを毎日あつかわされる。そうしていると偽せ金にふれると、それが偽造であるとすぐ見分けられるようになる。はじめから偽造のものと同物とをくらべて見せられると、正しい判別が出来なくなる、と聞いている。親鸞聖人が「真実を頭わす」という一事

福島先生の「法華経余話」は天王寺出版の雑誌から転載させて頂きました。先生が

の雑誌から転載させて頂きました。先生が仏書の読みはじめが法華経であり、やがて念仏者となられたが、御晩年に更に身をもつてお味いになったものであります。

「一道会の記」を詳細に誌して頂いて、皆様の信の声を聞かせて頂きました。榊原さんは御自坊で「一つの会」を毎月第二日曜の午后から開かれ、静坐と聞法の会として居られます。有縁の方々の御参会をお勧めいたします。仏法はもとより一人居て喜ぶ法であります。そうした人々が相集まって胸中を談合出来ればなお／＼ありがたいことでもあります。

杉藤様の「歎異抄の愚考」は続いて頂きましたが、七月には近角常音先生の御講話の筆録を頂いておりますので、先生の御忌月の前にお味読いただけますこととよろこんでおります。

### 御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、午后一時半

一道会例会

南区駈上町二ノ八八。市電、

新郊通二丁目下車

○ 毎月二十四日。午前午後。教西寺

法話会

昭和区小桜町。市電、御器所通り下車

市バス、北山町下車

定価 半年 二百五十円 (送共)  
一年 五百円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
印刷 人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番  
郵便番号 四五七

慈光第二十二卷 第六号 昭和四十五年六月十五日発行(毎月一回・十五日発行)  
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可